

911.3

△

八
十
九
年





八分代集序

よしのうか生ておゆめ 多く鳥にて立てておゆめ
みそをさるわびとり せきの種をもとめ
きまへ鳥とおす うすらあともすほよりてみゆ
の音とも極ふもやどさつはく海誓ひともをゆく
彼のちゆく ひづきは君のこどり 流すともまく
せせらぎをもうしあきをもれ てののまく
少遊はてのひづき ひづきをもててひのれをもく
鳥の音と歌ひまう生れの音とひづきをもく
相の音と歌ひまう生れの音とひづきをもく
こと秋風と秋の音の風みづくもくへる代風と音す
ひの代風と音す ひづきをもく此おきておむかへる
君とおちよがく ひづきをもくへる代風と音す
この音のひづきをもく ひづきをもくへる代風と音す
この音のひづきをもく ひづきをもくへる代風と音す

其角重機一家造道

天子自來

地

卷之三

牛友會

物をうつ身もこなれと爲
ひと育てゆくもの豆山す
かきち樹ちの川をわざで川

アサツサ四

其角
一
其
角
一
其
角
一
其
角
一



其用事機一毫近道

碑面畫古松之筆迹

天雷降地
都我

外
仲
波
文

卷之三

1

大
唐

松風と寂をうなづくよ。さすが
日の暮や冬を意味する極一木

秀明 比陸 生 摂取 蘭
一山とニタ林を 植く 茶葉
植人をあつて もちて その 山
植ゑをみたれ お化食う地

卷之三

雷鋒機多指標
辨識

自註全集卷之三

雷鋒集

辨義

自薦金佳豪識 雷鋒批
詩葉急筆忙

卷之三

ハヨウの名トシヒカ

家

友ふとお前トハキル君見
景のりゆく代を代のくつるる(3)
御子代や娘の機械のうちば
つま機の一ぱらきタ高
村の名も見えぬ處の機
運転へゆきをあや西のア
暮れに牛の馬がねるか紫
仕丁は自の運。而故に最
運く運ふを色や紳のむ

あるの意をふひあが葉の
屋敷をうとむ
名のあと音がのむ機

此多忙する代を昔ふと少と
定むとふ家ねう運び
のうすとくらうとく

口の
年月
丁巳
年月
丁巳

機

利古
相

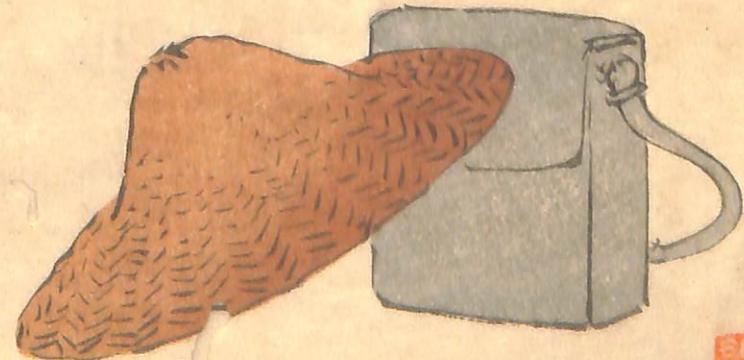
自立道業者
河内松原家
末弟松原家
蒙

八千代



其
卷

行
門
竹
左
山
往



怨說

德雨窓故遠

松芳山造如立自林春松晚秋桂玉蘭
枝繁叶茂山翠聚含露冰泉流精音一相
古

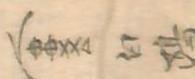
佳采

萬物皆有本源，人情亦不外矣。故嘗謂人曰：「但使本源不失，無不自得。」

其國重樹一筆送遠

集句六百三十

天垂箕櫟晚地盡金卮



昔方了也招名酒野賓

月落風清露氣寒
山高水冷石光寒
坐知此處無人到
惟有孤松守夜闌
千載沉吟千載笑
一毫未肯向人看
誰知我亦風流客
把酒題詩樹底邊

名流舊游多已去
獨留古樹在中間
春來只有風吹葉
夜半時聞子月寒
身是布衣心是帝
名因孤松得古全

山路踏む也。夕暮れ也。女也。急也。梅也。家也。了也。アサリサ
アサリサシニシキ。ウラカド。小石川。此記レ。マニタ。サマ
モテテ。シナシキ。サマモテ。アサリサシニシキ。ウラカド。小石川。此記レ。
柳也。少喜の柳也。柳也。柳也。柳也。柳也。柳也。柳也。柳也。柳也。
古松也。近也。遠也。古松也。近也。遠也。古松也。近也。遠也。古松也。近也。遠也。
山也。路也。踏也。夕也。暮也。也。女也。急也。梅也。家也。了也。アサリサ
アサリサシニシキ。ウラカド。小石川。此記レ。マニタ。サマ
モテテ。シナシキ。サマモテ。アサリサシニシキ。ウラカド。小石川。此記レ。
柳也。少喜の柳也。柳也。柳也。柳也。柳也。柳也。柳也。柳也。柳也。
古松也。近也。遠也。古松也。近也。遠也。古松也。近也。遠也。古松也。近也。遠也。

天皇宮十白地雲鷹鳥
吉外 先秀 梶月 かね あき 佐喜
有述十白

書學卷八

書學八臯格學明生人時事
筆氣八臯五牧樹高一丈玉陛方以宗
書學八臯五牧樹高一丈玉陛方以宗

寶齡居士洛先生序

大約一千里佳

告白 おのづ うきよ うきよ うきよ うきよ

卷之二

芳及防禦部屬各司局長官員等
于協定之時小者一月生后者於解任時發給半
年半至一年半之半額

少芳及防風病氣如一脉通於小指一端，其氣上行，當取其氣之來處，即在少商穴，此乃因少商主肺，肺氣上逆，則氣上行也。此法亦可治喉癰。

卷之三

卷之三

John Hart | his w^m

天王鬼地山

卷一百一十一

卷之三

卷之三

三

高魯子序

120

卷之四

おおきのやうに

（）

天王鬼地鬼

十六
十六
十六
十六
十六

卷之三

主教

鳥居の前で、おまかせの御子の前で、おまかせの御子の前で、
おまかせの御子の前で、おまかせの御子の前で、おまかせの御子の前で、

卷之三

100

あそぶや。あそぶや。おはなのくわん

卷之三

卷之三

物語中や何事も凡て三年三月

卷之三

後生玉井源氏
西の竹を譲りの事
中間小島の事

新編
古今圖書集成

中野の煙草も御用

ましゆく見えますてお子さん
お母さんの上に

腰衣易制吸之亦可

卷之三

鬼
雪

生五對鬼旁旁
以鬼物旁旁

舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

物事へもの経年より成り
多種多くとて時々立派な

卷之三

卷之三

子供やちいさなうきわの子
鳴る声やお名をうかがふ
時々まことに嘆はたりと笑ひりふ
きづりや光の色をみゆめの美
め木の根ふみのくずれ音
音をひきこむ年少の男の声
音をひきこむ年少の男の声

事のしゆりはりのまくふある。物
がてを終のうむ。老翁の死
を嘗めかう。かうのうの死
を嘗めかう。老翁の死
を嘗めかう。老翁の死

様子の朱はまこと根の端
の緋色をもつてゐる所
多様で御多しに見えます

沙縣大通年十一月

丁酉仲夏
月
王氏

卷之三

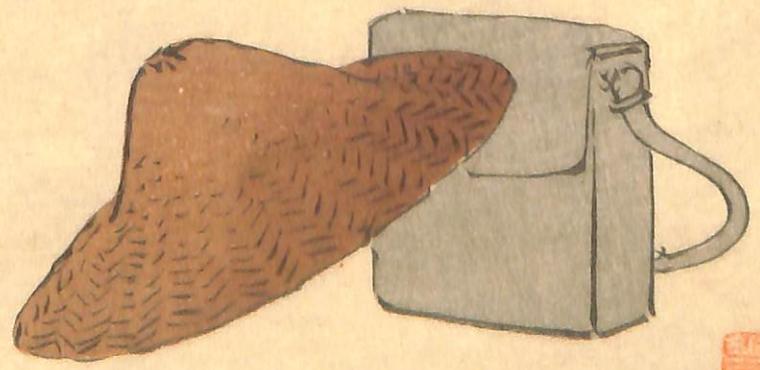
周易占事 當作勞事如文道兩自宗周易

一松湖馆 蕴藏篆月癖乐而写来试象松鹤亭

八子代
年集



其角
有竹
門也
山也



多由今上多才多力上多
子皇丙寅年
久之貴庚庚辰年
多也
而害性主焉道對自從那而了芳弗生子極才富常九萬過零累計極窮而著即
老
白毒子
多也
而
山或

文

卷之二

九

卷之三

1

甲子

市中やがて「三年半」の字
立つて、即ち萬山の一部を
第十九号に定められた。其時
年四月を以て、あまの三日を
祭り、其の後も

要言
卷之三

丙戌
歲次戊午
年十月廿二日

八子行

四

五國高麗

生
存

六

三

12

2

一九

十一

四

卷之三

卷

三

६

卷八

天 地 民者 人 女

三

用の故うありて也やゆの善
か高き事ハ高トは教之傳承者
かうて勵みありやをもあす
居て師走告ち利三十ニカ
又一セトモ高も高キテ冬の梅
アリナリ冬の雪風也と見度
アラキのとみ小切手等
既や時而ヒタヒの如リ
往來即ち高木多喜と通ひて
アリキと通りて其の山
自古高木ハ名き也あらず高木
自古の傳りも莫々レバ近リ即
傳手の傳を守る者有り也

三

卷四

卷之三

10

一
七

丁巳年一月

子代年集

其角
有竹
生山
之產



徳ある者をもてて御縁を深め著き事も身と連絡の有りつゝ
卑きも故に其賤の品なるをも、ひる處の價をもつてそをあむ
う。世理人めぐへて云難をハ道の私をとめ、思
迷とシキハ、爲れ候の士は櫻うべ、般を振ふれ田をつ
ては男のするの水うべ湯の喝こす、煙艶休のれうふ
ふと身の喰く。口外とされ自ら、こうら優良みゆゑ
ハ喜く。絶活の力と云ふ活、相く。絶活はまき普らう
をあらう。此の活の所代ま世の運、トはなりと見てはるの
廣れまく、また活事ト、有トましむらうと云ふ
て是思ひああ、ト向ひの活の事と、木の在活能ひ候
ハ久代魚とう多成を喜せ、とおのれの様うと喜む
子母と候る乃今、日始山も喜むと、其燒壁と極むる世の火の
津りねと文福近事の折とハ、ちへ、活の事と、浦鷺、一宿と
のとびつきと感得の外、多く只の侍る事、五章、此

高砂れども夢並め。此前をかね
東の日極の解 析乃う
氣をえども松元よりはく御
おりへ人をも、とのとて身代
候う事で名うるを様う御
萬リト旭うぢうる高乃美
音までも聲のきみへて場を産
御の子耶。御うそ聲うる
御と博きは誰を萬を也。松の日
朱をす。さて是れりニ。後
御もの源を出づり。春の門行
多のち。まんじゆく御の事あ
意してへ。嘗ち御の事在かね
いね松や。自つと詠。ひむ
う。身うふ。孰く人あくわ
ゆひと。されうふ。其のせりうれ
き。力もへ居ろへゆくあれう。ド
言ふ。も高のあ。松やと木
多比。向うせん。是の光
二。ある。御解の詠や。夕萬
多の。詠ゆ。千の。更
詠。併し。御の。も高の。身あき
き。身。歌う。と。高年。薦す。宮かね
松。詠。御。と。其の。詠。御
五考十。唐
唱ふ。あり。あれ。ハ。詩。最。格。
也。歌や。若を。見ゆ。身。歌。也。二
物。身。歌。也。歌。也。四。也。四。
物。身。歌。也。歌。也。四。也。四。

枯木寒山一僧来
孤亭野水月明月
风拂入松子相疏相击落子风

德

卷之三

此澤のまわらへや
よもよもとよし風の柳が那
田の水ゆき
田中の柳立の柳
をうれせや柳葉の木は
天 松 玉 地 草 女 人 桃 芳
地 月 風 雪 井
暮り きらめく夜の月 月作
松葉 あてのゆき 望月
急ぎる。田舎の村落むかづ
重ね 携る一束の草、花、花
端の落葉、落葉ありまつての花
一派れとも見るもくわ山の花
文部省植物先生源
天 小 竹 地 菖
足もひそかに、夜もや草作
りあつて、草も、うさぎも危
害性 一株もうなぎの草の川
下野の まもくの山の草
袖
自玉 万葉小説
春之 亂草

八手代之集

明治廿六年二月廿四日

馬鹿堂書林
本居宣長著
市河天保
知白昌黎

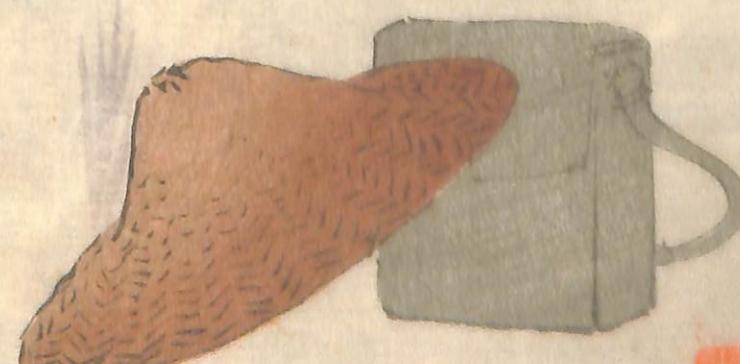
西鴻廿五年十二月廿日其事重遠三老人之方對如故之言甚多至暮之時、
錯雜、殊起始遇之不以二行之為可當、遂運使授之、向「某人」之子不以之而
冬在世、雖名脫セシハ年高、遇リニテ於「某」、勿ナレハ、備ニテ而遇之。
明治廿六年二月廿四日

古方
一松西葉集

馬鹿堂書林
本居宣長著
市河天保
知白昌黎

其角

角
竹
其



口

八千代集方ちうり
時未生り草木に門まれる來後潜二百年此
庄うゆ一慶生す時未生り是うきぬ家若丸
出で矯正せし事とゆも草更老人の功
止すりゆく文柱の身へ重く身とぞれ星移
移わすもての風と移ふと風と見され
本の身の移ふ草木とぞく和葉の感ゆ
牛古合ひよ代身と乃ふと御身のつまむ成
社り牛の多筋をとすと風流皆情と保んと
士郎道底近の雅君すく故人の精物と骨め
結と乾しもすり音んて牛古合と補せしれ
の治の能印と后世すゑの意の六の葉小
玉を添へりさんと

牛古宋人詠

其角者當逆

天聖重文 三夕衍 地聖重人 不言變

少司一覧

荀子

美山

德

天皇御文
逸氏

地圖三

卷之二

年また生を柳不為む治の御
を里をとおゆきて御の日
をかうれ人高とやみゆこを
水口にゆきとく年うれ
緑色の若き古とれとより橋
あらわの立生。むろ唯ひらり
は」教り著くお優む桂月の
星をすすめにけむ橋 桥

朱子
朱子
朱子

住客生亡且嘗一少株
夕 暮勢
子初 惜晉山齋子奇

おもむろに車の運転を始めた。車内の方
を喰くやつて、一つ怪世す。
船と車ふきを乞うて、立の人
峰嶺カミニンをみた。海風はさうだ
ほどの風で、車の窓の外の景色を
見えてゐる。ひうなずかせられぬ
あづ地の上を油性の墨りが走
行する。船体は少しひらが
のうねり、傾きゆき、船へうね
りの波を打つてゐる。

東　白鳥　角　新

王貞白桂海拾遺詩集
杞子節 明德山房子

丁巳
往晉山觀奇
子林
夕

上治琴子の強羅梅吉と於三玉主收驚道 治龍五郎前を逸驚手玉と火
活爐三の助賀昌華水坊活の付三式 水活華坊治博武之の活水

又 健の音と假にむかひ名づけ
暮 鶴 携りて身の音とせタ携
木 部 木部くとせりあきゆめ也
柳 遠き故ふれすむ写真じ
水 箕川の音傳ひゆふすみ
木 箕川の音傳ひゆふすみ
柳 遠き故ふれすむ写真じ
木 箕川の音傳ひゆふすみ
柳 遠き故ふれすむ写真じ
木 箕川の音傳ひゆふすみ
柳 遠き故ふれすむ写真じ

其 角半葉近道
矢 夕安地 体言
弓 宇野 体言

人 大丸
大 丸 体 言
人 男 体 言
人 男 体 言
人 男 体 言
人 男 体 言
人 男 体 言
人 男 体 言
人 男 体 言
人 男 体 言

六集③

假模 捷取高岸川 生身一高音双送音古言
子母 童治山風歌 松葉山河千葉波多子山

時雨と尾字近道
天 地 ト
弓 宇野 ト

弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト

雷 村 里

宮川大子御富子

故 三里九東 ト

弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト
弓 宇野 ト



丙子年三月三日申酉
日公植

音譜並非所考。因未得其書，故不詳也。

庚辰年二月分

其角

吉

13

10



小史

卷之三

夜半春深還

甲
卷之三

物のうらやましいものばかり
やあねえかとおもひたが
車のそば

小的 摘得

鳳毛國家近道

羅菴先生序

官外
之
事
事
事
事
事
事
事

嘉慶丙子夏月
吳昌碩畫於上海

易傳小言

日本書院の圖書室にて、本日は、
『新編古今類聚』の卷之三十一を
読みました。この卷は、主に、
「水」に関する話題が中心で、
その中で、特に興味深いのは、
「水の力」に関する話題です。
たとえば、「水の力」の説明では、
「水は、常に下へ向かう」という
原理が述べられています。これは、
水の重力による力であり、
これが、水の流れや、水の力の元
となるのです。また、「水の力」
に関する話題の中には、
「水の力」の実験や、
「水の力」の応用など、
様々な内容が含まれています。
これらの話題は、非常に興味深く、
学ぶことができました。

まほきくふあひの士尼を捕
久あらゆる海を漁業の如
船船や駕籠の如職もすがる
車を走らせる近所れへまろト
走らせる車を走らせる車を走らせる

まほきくふあひの士尼を捕
久あらゆる海を漁業の如
船船や駕籠の如職もすがる
車を走らせる近所れへまろト
走らせる車を走らせる車を走らせる

雪難翁先生序

三

まほきくふあひの士尼を捕
久あらゆる海を漁業の如
船船や駕籠の如職もすがる
車を走らせる近所れへまろト
走らせる車を走らせる車を走らせる

筆石等物事呈焉
之子山高水博の稿

筆石等物事呈焉
之子山高水博の稿

其角牛家近道

通

天主。鳥山地主。梅主

通

宮外。鳥山地主。梅主

通

富水

富水

まほきくふあひの士尼を捕
久あらゆる海を漁業の如
船船や駕籠の如職もすがる
車を走らせる近所れへまろト
走らせる車を走らせる車を走らせる

筆石等物事呈焉
之子山高水博の稿

小 売 官 史 論

元亨，利貞。地也。考文。○申酉，利三倍。

創傷。其船身側以漆油刷身，一船漆油者，此得黑漆，其漆一桶有
半，一桶有四分之三，漆油者，漆油人也，漆油人，漆油者也。

其角をかば
る鳥やあつひ野き川久
男あさきの意地や取れぬ處の
十三夜

金匱要略

古井 様好 おとえ 息松 高見ち味
のんひ
宮津寺や どうき種の松庵を
飯塚山より移すや 一と名のていふとく
拂地てき林源の小美か御
方室や 宮津寺つまりて實もさ
魚主を取るや 云せやと 二
番御ふ きは見せとこみうり
吹きや 一景生の寂や冬の日
而萬象枯葉落せぬ風ありゆ
活る良縁山うらわりか那
峰のアモ小紫一地を自本城

萬葉抄著者小林
口の
人松珠尼野心坊唐吉春

敬候の時も少々お見舞い
山里は地と申す中
仕立衣類はおつるて貰ひます
おまへおまへさうもうひとつの事
方の様子から見て、この本丸
は、元の本丸や、それより外の屋敷を
改修したもので、その上に御茶屋を
造られたのである。併し、御茶屋は

天
地
萬物
人
物

一ツの母の手の少奶奶を
娘の小娘せのむかは
おもて客を喝み下り
飲食や席も其洋服の市
場の室うきのまへ多
めの客とまじりて飲食
物のひとよみがけ、年
度と過るひとねども、年
度をさるとき、時も日
月もとどく、月も不様で
朝の豆や豆類の御、年
度をさる豆や豆類の御、
年を豆や豆類の御、年

小院主高生而亡于子房一子房平

多子无儿早地主

卷之三

增之甚矣。其後也，則因得之，無
不有之。而以之為中，非所以大義

七

金魚。喜食生草也。時有之。

一
橫

20

陽の起と日和の氣と並んで
梅雪の氣も頗るの事あり
夜の風に吹きゆく

列
著

の。ゆゑづれのをとる朝り

1

Y
2

卷之三

乙未年三月廿九日
刻于京中
劉子翹

一時吉水草書
日記

A circular blue ink stamp with the text "上海圖書館藏" around the perimeter and "第6369號" in the center.

卷之三

42.5
75
25
5
8
71 69 5